

えていることにも窺われる。今後、細部については、各作家、各方言等の個別調査でこの広域に亘る調査は修正されるべき点も持つと思うが、Renson 氏の労作は onomasiologie の記念碑として残ることは確実である。

(慶応義塾大学助教授 松原秀一)

A. Roncaglia, La Lingua dei trovatori

著者の Aurelio Roncaglia は 1917 年モデナの生れで、トリエステ、バヴィアの各大学で教えた後、1956 年より Angelo Monteverdi の後を襲ってローマ大学のロマンス語・文学の教授となった学者、すでに Chanson de Roland の校訂本 (Modena, 1947) はか、フランスの武勲詩にかんする研究、トルーバドゥール、とくに Marcabru の研究にすぐれ、現在その校訂本を準備中と聞いております。

表題の書物は、"nato nella scuola e per la scuola" と著者自身が書いているように、古代プロヴァンス語研究を志す学生のために書かれた 140 p. の小さな入門書であります。まづ造本活字などエレガントな体裁にひかれますが、単に体裁のみがエレガントでないことは、最初の章を読むだけでも十分に知ることができます。著者はまづ簡潔にプロヴァンス語とフランス語との関係にふれた後、南フランスの言語的・文化的特殊性を言語基層、南北フランスのローマ化の違い、ゲルマン化の有無の問題をかなり詳細に論じています。事実南仏が早くからローマの属州としてローマ化が他の地域に比して著しく進んでいたこと、他方北仏がⅤ世紀からⅧ世紀にかけてゲルマン化の時代であったのにたいし、南仏ではほとんどゲルマンの影響がなかった(ロマニア全体に共通のゲルマン的要素は別として)ことは、この二つの言語のその後の発展を考えてゆく上で最も重要なことでありましょう。

トルーバドゥールの時代の南仏方言は、北仏の場合同様きわめて多様であったのですが、北仏と違う点は、詩人たちが用いた言語には最初からほとんど方言差が見られず、北仏のように詩人が使用した言語からその出身地を推定することがほとんど不可能な程であったことです。著者はこのような文学語としての一種のコイネが生まれた背景に、リムージューの今はない聖マルシャル修道院の影響のあったことを示唆しています。これは必ずしも著者の創見ではなく、かなり以前から、この修道院が中世初期の文化に果たした役割、とくに問題のトルーバドゥールにかんしてはその音楽の起源の問題に関連してジャック・シャイイなどによって注目されておりましたし、一方古代プロヴァンスの現存最古の文学作品 Boeci がリムーザン方言で書かれており、その他この地で中世初期の最も重要な作品の幾つかが製作されている事実 (cf. D' A. S. Avallé, *Cultura e lingua francese delle origini nella "Passion" di Clermon-Ferrand*, p. 53) から分かるように、この地方が中世初期の文化の一大中心地であったことは明らかです。著者はこのような背景からリムーザン方言を基調とした南仏の共通文学語が成立していった事情を述べています。しかし著者はまたこの共通語が、他のどんな方言的要素、どんな階層の語彙をも拒まないだけの十分な柔軟性をもっていたこと、綴字の面でもきわめて大きな自由をもっていたために、この詩的言語が一層の豊かさを増していたことを指摘することを忘れません。一例をあげれば、"騒音"を意味する brug は次の 3 通りの韻をふむこ

とができたのです。brug:cug(<cogito), brui:cui(pron.), brutz:lutz(<iuicem)

いうまでもなく、この書の性質上理論の面で独創を期待すべきものではありませんが、第1章の理論篇が全体の3分の1の量を占め、註では普通入門書にみられる以上に多くの専門的な参考書が挙げられていることをみても明らかなように、入門者にたいして最初からしっかりした理論的な基礎を与えておこうという意図がみられます。

続く第2, 第3の章では史的音韻論・形態論がほぼ等分(各35p, 41p)に論じられています。このページ数で古代プロヴァンス語のすべてを論じつくすことが不可能なことは当然ですが、著者は例えば音韻論では各音韻を個別に取扱うことをせず、音韻のaccentの有無、位置などによってそのたどった変化を論じ、けっきょくは要を尽しており、簡略ながら綴字の問題にもふれております。形態論の章では、例えば動詞の変化はその活用を語根の型によって分類し、その変化を説き、動詞変化の基本をすべて言い尽しているのは、maestroの手並の程を感じさせます。

要するにこの小冊子は、これ1冊をもって直ちにあの無類に難解精緻なトルーバドゥールの詩の世界に入ってゆくことができる、と云うようなものではありません。そのためには初心者に必要な細部が欠けております。とくに個々の重要な不規則変化動詞の活用表などが是非とも必要であったと思われます。しかし入門書としては、確かな理論的な基礎にたいする配慮、全体としてバランスのとれた記述など、類書にも見られない長所のあることも見逃すことはできません。(Aurelio Roncaglia, La lingua dei trovatori, profilo di grammatica storica del provenzale antico, Edizioni dell'Ateneo, Roma 1965)

(明治大学助教授 神沢栄三)

[32ページより続く]

他方、-KT->-it- はケルト語の素地が直接影響した結果とも説明できる。つまりラテン語の-KT-がケルト語とラテン語の両語を話す人々によってケルト語子音群-xt-<*-kt-と同一視されたのである。

この素地説を支持するのはこの現象がケルト語圏に特有のものであるという事実である。しかしケルト語圏に属さない広大な地域にもこの現象が見られること、また劣勢言語の諸特徴がラテン語の中に導入され残存するに適切な社会・言語学的条件を広大なケルト語圏全体にわたって想定せねばならないこと等の難点もある。」

どうやらこの変化、純音声学的にまた多少ストラクチャルに説明しておいた方が無難のようである。

(東京外国語大学 助教授)